



(吉野山)

奈良・飛鳥京跡

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村岡
- 2 調査期間 第一〇四次調査 一九八五年(昭60)三月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 亀田 博
- 5 遺跡の種類 宮殿跡
- 6 遺跡の年代 七世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

飛鳥京跡は明日香村岡に所在する七世紀の複数の宮跡からなる遺跡で、一九六〇年度以来発掘調査が継続的に実施されている。遺構

は「上層遺構」「下層遺構」に区分できるが、下層遺構は部分的に遺構が検出されているだけで規模・構造は明らかにない。上層遺構は「内郭」「エビノコ郭」と呼んでいる長方形の区画とそれを取り囲む「東外郭」遺構などからな

っている。

第一〇四次調査は工場改築に伴う事前調査として実施したもので、面積・期間の制約があったため僅か一六㎡を調査したにすぎない。調査地は第四七次、第五一次、第六六次調査で検出した東外郭遺構の延長上にあり外郭大溝(SD七四一〇)と土坑が検出された。検出した大溝は地山である軟弱な岩盤を浅く掘り窪めて玉石を積み上げて構築されていた。溝は幅一・二m、深さ〇・五mであるが、底石は敷かれていなかった。この溝の東側には、溝側石の高さのレベルで黄褐色の山土状の土層があった。この土層を取り除き掘り下げたところ、楕円形(南北一・四m、東西〇・五二mの大きさ)に固まった遺物を検出した。木片・木簡削屑・木葉等が圧縮され一塊となったもので、その周辺部は僅かに立ちあがり、土坑の底部に遺物が堆積した状況を見せていた。この土坑は直接、大溝と重ならず、またトレンチの壁にからなかったから、遺構の層位的な位置を明確に示すことはできないが、大溝を検出した面からは土坑は見えず、東側を掘り下げて初めて検出できたので、大溝が完成しその周辺が整地される以前のもので考えられる。

土坑から一〇八二点の木簡削屑、木材加工片、木葉、桃・瓜などの種子が出土した。出土状況から見れば、これらの遺物は長期間にわたり投棄されたものではなく、一時に一括して捨てられたものと見られる。木簡削屑と木材加工片は当初から混在していた。

東外郭遺構は上層遺構の東側を画する遺構群で、大溝はその最も東側にあるから、この大溝の東側に作られた土坑は宮域の外にあったことになる。宮域内で生じたゴミが一括して宮域外に持ち運ばれ埋められたものと見るのが自然であろう。

8 木簡の积文・内容

飛鳥京跡第一〇四次調査において、東外郭大溝SD七四一〇の東側を掘り下げたところ、土坑状遺構が検出され、圧縮されて一塊となった木屑類が一括して出土した。大量の木屑類の洗浄中に、木簡や木簡削屑の含まれていることが判明し、最終的には一〇八二点に達した(削屑の洗浄や整理は、佐藤純子氏の努力に負う所が大きい)。

ほとんど全てが小さな削屑である。当時、橿原考古学研究所所長の岸俊男氏、発掘担当の亀田博氏、和田の三人で解説を進めたが、諸般の事情で報告書の刊行が遅れている。目下、報告書の準備を進めているので、今回の報告は、当時、公表された削屑で内容の注目されるものとどめた。なお『木簡研究』では、原則として削屑(〇九一型式)の法量は記さないが、参考までに最大長と最大幅を注記しておく。

(1) 「辛巳年

44×18 091

(2) 「大乙下□□

82×11 091

(3) □小乙下

35×11 091

(4) □大津皇

63×17 091

(5) 阿直史友足

102×15 091

(6) 「伊勢国

47×15 091

(7) 「大友□

73×18 091

伴出遺物の年代から、(1)の辛巳年は天武一〇年(六八二)とみて間違いない。「辛巳年」と記す削屑は他に四点ある。これまで飛鳥京跡では、第一〇次、第五一次でも木簡が出土しているが、年紀を記すものは初めてである。また「閏月」「閏」と記すものが数点あり、天武一〇年は七月が閏月である。

(2)(3)の大乙下・小乙下は、大化五年二月から天武一四年正月までの間に施行された冠位である。(4)は天武天皇の皇子である大津皇子で、ほかにも「大津皇子」と記すものが数点ある。(5)にみえる阿直史は、天武一二年一〇月に連の姓を賜わっている。応神朝に渡来した阿直岐が阿直岐史の始祖で(応神紀一五年八月条、『古事記』応神段にも阿知吉師を阿直史等の祖とする。(5)のほかに、阿直史友足をさすかと思われる「友」の習書が六、七点存在する。

(1)~(5)により、今回出土した削屑は、天武一〇年か、その直後に

一括して投棄された可能性が大きい。天武一〇年三月から、帝紀および上古諸事の記定作業が開始されており、第一〇四次出土の削屑の内容との関連が注目されよう。

(1~7)
8 亀田 博
和田 萃

